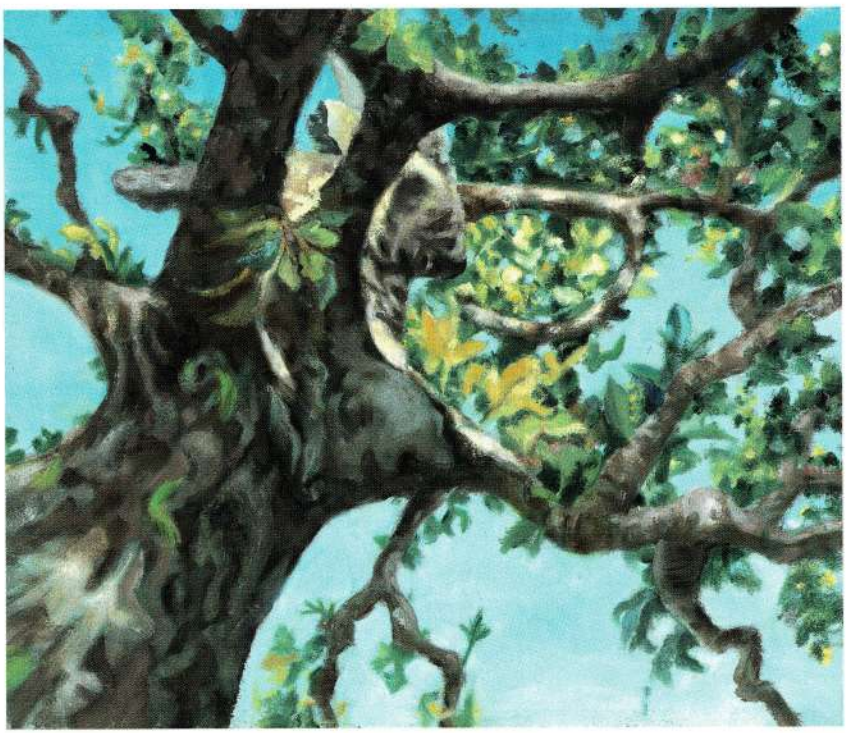
村野次郎創刊

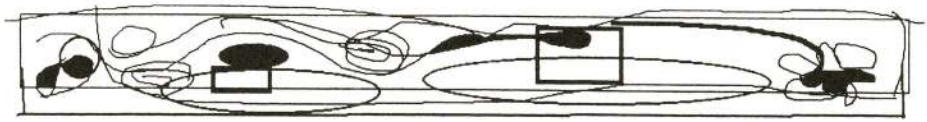
香蘭



2023年（令和５年）６月号

第 100 巻　　第 6 号　　通巻 1110 号

二〇二三年（令和五年）六月一日発行（毎月一回一日発行）　香蘭　第一〇〇巻第六号



香　　蘭

2023年（令和５年）６月号
第100巻　第６号　通巻1110号

目　　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（94）……安田恵子…表二
近詠十五首　遠からず……中井房江…2
作品
一……4
二……22
三……28
推薦香蘭集……36
香蘭集……37
特選　作品一　（四月号）高畠　憲子選（十作品）……16
特選　作品二・三（四月号）丸山三枝子選（十作品）……18
一頁公論（25）もう一度訪ねたい場所―宮崎県児湯郡高鍋町―……城　富貴美…15
村野次郎への旅（158）……千々和　久幸…20
エッセイ・自由研究　さりげない歌……松沢　みどり…40
焦点（四月号）ささやかな幸せを詠む……渡辺　礼比子…42
七首抄（四月号）……斎藤（俊）・三澤・菊地・西﨑…44
庄司健造「初春」評（四月号近詠十五首）……市川　義和…45
作品評（四月号）　作品一……西野　美智代…46
作品二……岩田　明美…48
作品三……飯島　智恵子…50
香蘭集……藤田　祐恵…52
緑地帯……岡野・関口（洋）・篠永…54
耳言あれこれ（19）……田中　あさひ…57
明宝研究会第一三八回三月例会　千々和歌集・詩集を肴に鬱憤晴らしの会始末記…58
他誌拝見127……竹本　幸子…66
歌会及び会合・会員消息・他……69
編集後記・新宿日記……74・表三
表紙絵……中村　陽子「春ひかる」　目次・緑地帯カット……和田　和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（94）

呼びまどひよろこびましき母の子は
一郎次郎三郎四郎五郎六郎はかけて七郎

『夕あかり』

安田恵子

この歌の「かけて」は亡くなられたと解釈した。愛情深く育てられた作者の母への感謝の気持が読む人の心をあたたかくする。又兄弟の名を並べ、ひとつのリズムになっていると思う。この歌を読んだ時、男子六人を生み育てた伯母が思い浮かんだ。全員名前の頭文字が同じであることもよく似ていて驚いた次第である。

残念ながらやはり最後の六人目の子は早く亡くしているところも同じである。六人目が生まれ、すぐに夫を亡くしたので女手ひとつで五人の男子を育てた伯母の苦労は並のものではなかったはず。しかし伯母はほがらかで、いつも笑顔でくもった顔の記憶がない。残念ながら五十代半ばで亡くなったが、こんな伯母に密かにあこがれていたが、私はついにひとり子の母にもなれず、さみしいかぎりである。

（『夕あかり』238頁、『村野次郎三百首』19頁に掲載）

四選者の作品

さよなら

平塚　千々和　久幸

さよならをいくたび言いしか曖昧な別れでよけれ　朽ちてはならぬ
嘘っぽい黄昏を背に逢いに行く紋白蝶の消えた野道を
存在が鬱陶しいということか遠くで汽笛が鳴ったりはせぬ
婆さんが転べば即ち転婆だが酒乱の爺い七転八起
なぜクレタと問いし友なりエスカルゴ食うこともなく死にてしまえり
平和令和令和平和と唱えつつ鶏（にわとり）の羽毟っています
誕生日祝う理由のさらになし生きてる限り巡りくるなれ
亡き妻が枕辺に来て囁くは「死はダンディズムではありませぬ」

佳き日

鎌倉　髙畠憲子

苦しき事語らぬ九州男児なる代表笑むを久びさに見つ
代表の佳き日に参会せし幸をポケットに入れ帰途につきたり
ポンと今何かが開いたのだらうコルクひとつが手のひらに在る
おや、今朝は椿いちりん生けてある　勤務ゆるみし夫の仕業か
長谷寺の梅満開のチラシより梅の香立ちて行つた気になる
梅の花探せる人の戻りけり白きひとひら肩先に付け
この谷戸のわづかなる勾配が試すなり自転車漕げるわが筋力を
ウグイスの初鳴きの朝に初鳴きの歌採りくれし矢野さん想ふ

カラスウリ

我孫子　丸山三枝子

滝壺の向こうに赤く下がりいる独りが一番いいカラスウリ
三月の野道ひかりて驟雨すぎもう戻れない道のようなる
我のみが人に遅れて見ていたり濡れる雀と濡れないすずめ
ふうりん堂の八幡の藪を掻き分けて白い子猫の絵はがきを買う
余生とう言葉あふれる本屋にて時刻表買う五年坊主は
水道局庁舎二階に間借りする教育委員会に来たりぬ
傘すぼめ入りたる庁舎を傘さして出でて来たりぬ一時間後に
待つほどにあらね生ぬるき風吹けばベランダにくる桜はなびら

春のかはみづ

東京　桜井京子

わが立てば誰かが座る地下鉄のシート終日ほのあかりせむ
トモさんがくれたるミモザがキッチンで華やぎてをり別れの春よ
どうでもいいことだつてある冬のカメ岩の上にて岩になりをり
荒川と中川であふ春の日よ小舟がうかび旗が揺れをり
その先におほきな海が広がるを知るや知らずや春のかはみづ
大切なガラス器こはれてしまひたり私のなかの何かはじけて
代はりならいくらでもあるネットにて買へば翌日届けられたり
上等の傘を買ひたり差しながら体のどこかを濡らして帰る

作品一特選

（四月号作品から）　　高畠憲子選

卒寿　　川越　相川公子

秩父嶺を濃き藍色に浮き立たせ母の忌日の夕日が沈む
逝きし人の名をあげながら弟は過疎になりゆく古里を言ふ
ふるさとの赤城嵐のあの寒さ思ひ出させて大寒波くる
フリーズ・ドライの春の七草かゆに入れ老いの二人の健康ねがふ
顔のきずの抜糸を無事に終へし夫と遠き雪富士みつつ帰り来
少々のもの忘れはあれわが夫は大安のけふ卒寿むかへぬ

・文語旧仮名に重厚な叙景歌を詠む。高齢夫婦ならではのいたわりが温か。

人手不足　　東京　市川義和

マンションの公孫樹並木は黄葉の盛りのままに枝伐られたり
落葉の始末厭ふか　葉の付きしまま枝切られ裸木（はだかぎ）となる
コンビニも百円ショップもセルフレジ増えてゐるなりこれが現代
庭木のことコンビニのことつづまりは人手不足がキーワードなり
柚子二個を浮かべて浸かる宵の湯に一年の疲れほぐしてをりぬ

・「人手不足」の悩ましさを身近な事象から鋭く視る。

一月の月　　川崎　伊藤美恵子

正月を子らと過ごしていたく疲れいのちからがら家に戻れり
あさ朝にさす目薬の冷ややかに目に心地よし今日寒の入り
夫逝きて半身削がれしうつし身が半身（はんみ）に見ている一月の月
がんばらねばがんばらねばとがんばってわたしは何に頑張ってるのか
千両の赤実うつくしとわれの見て今度は鳥が美味しと食べる
久びさにうるおう寒の夜（よる）の雨息なめらかに吾を眠らしむ

・半身削がれし、に実感あり。四、六首目、自己客観の歌人の目。

メモ　　東京　伊藤康子

買い出しの日時品目記すメモ特売チラシとどこかへ行った
老い母の作るサラダのアクセント端のつながるすだれ大根
自販機のモーター音のみ響いてる休憩室の一月一日
歌会には笑顔ぬくもり溢れおり新宿地下を迷いて着くに
牛減らせ一頭に十五万出す減反させた手口と同じぞ

・活動的な日常を歯切れよく活写する。五首目、鋭い社会詠。

次よろしく　　豊中　柏原陽子

寒き日のこども園にてこどもらがいつもの元気な声を響かす
牛乳を配る吾らにしまく雪一歩ふみ出すま白の路に
軍手はめ身体縮めてさあ一歩ペンギン歩きの今朝が始まる

裸木の楓が桜にタッチして次よろしくと言うにあらずや
寒風のすさぶ朝の寺庭に新しき絵馬のどれも揺れいる

・極寒の早朝、牛乳配達の歌の厳しさ。「さあ一歩」と自分を励ます。

六十五年　　川越　菅沼　はる子

セニアーに乗りて麻雀に行きし夫ついこの間の事と思へる
入院させなくて良かつたしつかりと五十五日の蜜の日々あり
結婚をして何年と聞きたれば六十五年と迷はずに言ふ
六十五年幸せだつたと言ひくれし夫に最後のほほずりをする
つらつらと思ひ起こせど大き声出して怒らぬ夫であつた
共白髪なるまで添ふの約束を確かに守つて貴方は逝つた

・夫をしっかり看取った。長き結婚生活の全うと夫婦の絆を刻む。

年を送る　　伊達　手塚　春世

拂ふべきすべてを拂ひ新年迎ふる落着きみせて並木の続く
年の瀬の市始まれり見開きし魚の目ずらりと隅まで並ぶ
逝く年の光穏しき窓の辺に父子の語り刻長くあり
年送る一日籠れば人居れど人無きごとき家となりゆく
かたはらを過ぎたる小犬戻りきて年ゆく光その目に受くる

・静謐な詠み口に品性がある。二首目、魚の目ずらり、が壮観。

日日新たなり　　東京　土井　紘二郎

木洩れ日の落葉を踏みてゆくほどに暫しながらも無になるこころ
お台場の砲塁跡にひつそりと石の竈が晒されてをり
神仏をたのむにあらずただ歩くために巡れる七福神を
七カ寺を巡る四時間ウォーキング歩きに歩き二万五千歩
溜池に白鷺一羽舞ひ下りて瞑想に入る冬日あびつつ
老いの身に日日新たなり陽をかへし上向きに咲く路地の山茶花

・力ある作者の作品を再び誌上に読める幸。山茶花に心象がある。

大根のステーキ　　東京　西野　美智代

歌会始の召人といふ大役に別人のやうなゆかり先生
ハムレットのチケットを購ふ　上演の三月末まで生きねばならぬ
銀の会の月に一度の豪遊に亀戸大根のステーキ食す
ふたたびの出詠待ちて六年を佐々木智恵子の名は消さずあり
AIを超える鬼手をも繰り出して羽生が挑める二十歳の王将

・三首目のウイットが出色。一連にユーモアや人への温かさが滲む。

年明くるも　　所沢　吉澤　容子

お年玉四つ揃へてこの年も生くるといふ事知らさるるやう
静もれる正月の朝眼を閉ぢて鵯らしき一声ききぬ
賀状来るを心待ちする日を置きて教へ子の娘訃報を寄する
教へ子の訃報手にして長き夜はただただ深く冷たき水底
幼な子の声無き正月重なりて動画の赤児の笑みに救はる

・正月は命を見つめる原点。自分、教え子、幼い者たちへの思い。

作品二、三特選

（四月号作品から）　　丸山　三枝子　選

〈作品二〉

本音の歌　　東京　大島　昌子

新聞の暗きニュースを読み終えて窓を開ければ満月冴ゆる
夕映えの空を背に立つ鉄塔よ孤高の人のごと立ち尽くす
標識に居たる鴉が夫の出すゴミバケツ見て「かぁ」と飛び去る
歌会終え仲間と帰る道すがら本音の歌に胸熱くなる
古びたる雨戸の音をたてぬようゆっくり開けるせっかちな夫は

・四首目では、本音の歌の訴える迫力に感動した作者に心打たれた。

元旦　　鎌倉　小笹　岐美子

今はまだあなた励ます術は無し友の背中をゆっくりなでる
山陰に君は住めぬと言われたる若き日ありき　日本海側雪
流氷を見に訪れし北の街今豪雪に停電すという
ハムになど目もくれないで刺身食む五人の孫は漁師の血筋
正月に使いし重箱丁寧に拭きあげ仕舞う　今日も冬晴れ
散り残る枯葉の陰に蝋梅はまろき莟をふくらませおり

・二首目の蘇った過去は作者の故郷であるかも知れない。今日は雪だ。

脱兎のごとく　　常陸太田　藤本　佐知子

今年はも脱兎のごとく過ぎゆくか老い増すわれは転げつつ生く
本棚の左右に卯年のカレンダー下げて何待つまた朝が来る
ひと日ごと小き課題を熟しつつ例えば歌など詠みつつ生きん
こっそりと年始まわりの鳩が来て隈なく庭をめぐりておりぬ
外灯の灯る時刻の遅くなり田畑ものったり春を待ちいる
病院のロビーに車椅子ふたつ夫が妻押し妻が夫押す

・一首目の年頭の老いの感慨は、六首目の老老介護の現実に行きつく。

ストッキング　　さいたま　松沢　みどり

制服にズボンを履いてもよいという通達が来て女子は喜ぶ
スカートは支給ズボンは自費購入それでも女子は全員ズボン
窮屈なストッキングはもう履かない暖かいズボンをしまむらで買う
ズボンなら朝の掃除も寒くない鼻歌交じりで便器をこする
帰宅してストッキングを脱ぐときの解放感がもう懐かしい

・連作掉尾の下句、窮屈さからの解放感は瞬く間に過去となる。

出勤日　　横浜　三澤　幸子

咲きおえし皇帝ダリアの天辺に丸き実あまた付きているなり

越しゆくと譲り受けたる南天が冬の我が庭を数多彩る
若き日のお洒落づかいのスカーフの役立つ季節派手目もよろし
力込め洗面台を磨きおり「筋トレ筋トレ」と唱えながらに
週四日出勤日とぞ身支度し夫は出でゆくゴミ置場まで
救済へつながる一歩と位置づければ無駄になるまい安倍さんの死も

・五首目のユーモアは傑作。六首目の救済は政治家に読ませたい歌だ。

〈作品三〉

五叉路　　川口　川久保　百子

路線バスの左折の合図を聞きながら今日の私は五叉路に立てり
駅前の再開発に消えた街かぜが過ぎれば枯葉舞い散る
青天に飛行機雲がまっしぐら今日は一駅あるいてみよう
冬晴れの午後は散歩にでかけよう『海辺のカフカ』リュックに入れて
持て余す身を置くカフェの窓のそと何時からあるのか白い山茶花

・どれも下句に動きがあり、作者が鮮やかに立ち上がってくる。

埋み火　　島根　澤田　久美子

枯葦もまばらとなりし川縁（かはべり）に年かはりたる朝の日が射す
年明けて三日過ぎたり風花を連れてゆるりと郵便車来る
会ひたしといふ賀状来て想ひ出に埋み火ほどの温もり点す
新雪の積もれる庭を一番に歩きしは猫　足跡しるく
閉ざされし言葉がふつと甦る軒の氷柱の解けてゆく午後

・どれも下句の転換が新鮮だが、三首目と五首目の抒情質は平板か。

雪の歌　　松江　馬場　美信

メジロ等は雪の止み間を啄みて挿したみかんに雪降り積もる
雪の歌君はどっちが好きだろうわたしは穂村きみは白秋
桜草ビオラパンジーあらせいとう眠ったふりして春を待ってる
何もかも雪で埋もれた公園に赤いブランコ風に揺れてる
仕方なく散歩に出たるくうちゃんの金平糖のような足跡

・二首目の穂村のは「ゆひらと騒ぐ」、白秋のは「雪よ林檎の」の歌。

柚子　　横浜　原　トモ子

年明けは三日続けて駅伝をテレビ観戦がわが娘の楽しみ
正月に家族揃いてその後の高血圧は嬉しさのせいか
正月の息子の仕事はカニの身をほぐして皆にふるまうことに
三ヶ日ラジオ体操休みます恒例となる私の正月

・三首目の「息子の仕事」を頼もしくも愛おしく思う作者であろう。

フォレスタを聴く　　豊中　山本　田鶴美

買物を豪雨に阻まれ諦めて今日はしずかにフォレスタを聴く
真剣に日本シリーズ見る夫よあなたは少年の顔に戻りて
術終えて逢いたる父はいい顔をしてるとつぶやく息子は笑みて
年末に病ふっとび四人家族揃いて新年迎えられたり

・二首目の夫像、三首目の祖父への息子像が微笑ましく偲ばれる。

村野次郎への旅（158）

大正期の「香蘭」（十九）

千々和　久幸

前号に引き続き「香蘭」第四巻第九號（大正十五年九月号）を読んでいる。同人欄の作品からアトランダムに抄出する。

線香花火　　本間　樂寛

・日の暮れてなほ蒸しあつき宵の庭花火あげつゝ子等のにぎはし

・庭隅にひそまりつどふ幼子ら線香花火は闇にひらけり

・この日頃勤務にし出づる朝の間を庭に下り立ちて花甫つくる

盛夏のころ　　冬野　木枯

・雨すぎてふく風すゞし窓の外にひともとたかき日ぐるまの花

・家のものみな晝寝せり軒下の樋にこもらふ小雀のおと

・病める子の眠れるそばに心落ちず熱のにほひをさびしみにけり

夏の雑歌　　南部松若丸

・夕されば眉見に涼しき草の穂の穂向きさゆらぐ風いでにけり

・このあさけ塵にまみれて死にゐたる草かげろふを掃きすてにけり

・小夜床ににほひのかよふ百合の花かくもすがしくいく夜かいねむ

山行　　深野庫之介

・山深くわれは來にけり笹の葉に降る雨の音も耳になれつゝ

・火のまへに手をかざしつゝしみじみとひにやけし色をわれは見にけり

・槍の小屋は彼處か未だ遠しもよ誰やら出でゝ手を擧げてゐる

汽車にて　　杉浦　翠子

・田の中に祠をかこむ杉の森汽車より見えて遠からなくに

・窓下の草より玻璃戸に飛びつける蝗は我に腹見せてあゆむ

・家かこむ草生に朝日さしくれば我は起きむか寒がりてゐる

いずれの作家の作品にも壮年期の若々しい気息や暮らしぶりが活写されており、詩が青春の文学であったことが窺える。まさしくこの時期が「香蘭」の青春であったろう。今日のような先細りの集団にはない、活気とエネルギーがいっそ羨ましい。これを束ねた先生が三十代を少し出た程度の年齢だったから、まさか今日のような高齢社会、高齢結社の到来は想像外だったろう。

次いで前月歌壇合評を読もう。評者は杉浦翠子、今井嘉雄、穂積忠、池上秋石である。

「創作」

（一）立ちよりてわが驚きぬ若竹の葉末は露の玉ばかりなる

（二）あけくれのたべものまづき夏の日は西瓜のつゆを吸ひて生くべき　若山　牧水

（翠子）（一）の歌の手法として一二句の「立ちてより我が驚きぬ」といふ仰山な言葉使ひ

に驚かされた擧句、結句の「玉ばかりなる」の熱のない死語に呆然とさせられます。「若山さんそこに立つて何を驚いて被居るの」「若竹の葉に露が一杯だもの」「そりや當前だワゆふべ雨が降つたんですもの。驚くことはないワ、あなたお天氣になりやあ、日がさすもの」

(二) 夏日、食慾不振を唱つた歌は澤山ある。然し、「西瓜の露を吸ひて生くべき」何と云う露骨な厭な言ひ方と低級な心持だらうへなぶり作りが「物ぐさびと西瓜の露を吸ひて生ききりぎりす髯を伸ばしておはす」と申す。ご要心。

編輯者に願ひます。無名の人の作からでも良いもうすこし生氣ある歌を抽いて批評させて下さい。でないとたゞ私が罵倒する形にばかりなります。かふ云ふ種類の歌ばかり見せられると短歌は近い將來に滅亡すると論じたい。寺院あり佛像はあつても精神の失せたぬけがら宗教のやうに、形式短歌が續いたからとてそれに不滅を唱へられるでせうか寂し。

(千ヶ瀧にて)

(忠) 前の一首は上の句と下の句と置きかふべきではあるまいかこれではあまりに平明にすぎると思ふ。それからいま少し朝のあの新鮮な空気も表現してほしい。立ちよりてわが驚きぬではものたりないわがのがも氣になる。

二首目の歌心もちはいかにもと同感されるが表現が何となくものたりない。

「國民文学」

(一) 二鉢の朝がほの苗あさなあさな妻が水やるにたけ伸びて來ぬ

(二) 池の邊は夕かたまけて風なぎぬ藻草ゆらぐは魚遊ぶらし　川崎　社外

(翠子) (一) 二鉢と云ふ言葉がこの歌の上にどんなに働いてゐるでせう。「ふたもとの梅に遲速を愛すかな」と云ふのがあるやうに。私には二鉢のことわりに目的のなさすぎる憾みを覺える。結句の「伸びて來ぬ」はまづい、「あさがほ」を「朝がほ」と書くのも亂暴で假名でなくて書くなら矢張植物の書を調べて學名で書いた方がよくはないでせうか。

(二) これは無難の歌でせう。然しなんと月並の歌でせう。かう云ふのは巧くて面白くない歌である。たとひ表現が未熟であつてもどこか作者が神經を働かして、自己の眼をひらいてゐる作品に會ひたいと思ひますが、いかゞにや。

(忠) 私はこの歌をよんで何等詩的感興がよびおこされない。私は現代歌壇があまりに日常茶飯事まで歌にしすぎると思ふ。もつともこれは私がまだ若くその道に至らないからだと云はれゝばしかたがないが…。

二首目内容表現ともあまりに常套(コンベンショナル)的であると思ふ。近頃あまり…らしと云ふ風な推量の歌が多すぎる。安易にまとまるかもしれぬ。

「水甕」

(一) 繰りかへし説きてつつましいいささかは心にふるゝ齡となりぬ

(二) 抱ける兒の寝に入りにけり圓き頭あぎとになでて獨り樂しむ　松田　常憲

(翠子) (一) は、一二句は要らないと思ひます。「心にふるる齡となるぬ」これだけで良いと思ひます。それに「繰り返し」位は入要かやしりませんが、二三句は全く蛇足の感です。

(二) は、「獨り樂しむ」はあまい。

二首ともあまり感動の少ない歌と思ひます。

(忠) 松田さんは國學院出の先輩であると云ふ事を聞くともなく聞いてからその歌にも私は前々から注意してゐた。松田さんの歌は水甕風の美しい詞と空穂氏流の内容の自由さの立つた素直ないいものである。

(以下次号)

遠からず

中井　房江

限界を越えて消滅するという雪割草咲くなだりの里は

われを乗せ夕べ漕ぎ出す伝馬船祖父の話も舟もゆりかご

網うつと夕べ沖へと漕ぎゆけば飛魚舟をとび越えてゆく

夏の夜の真闇の里を弧を描き照らし出すなり灯台の灯(ひ)は

わが母の俳句の師たりし灯台守ガーデニングが殊に上手で

四年間通いし冬季分教場四学年が四方を向きて

暖房はふたつの囲炉裏朝なさな熾る炭火が運ばれて来た

分校は廃校となり灯台も無人となりてすたれゆく里

折々に聞かされきたる伯父の死は終戦まぎわの機雷爆発

安全な浮標(ブイ)と言われて網かけて引きし十三人の命散りたり

塩を売り味噌も豆腐も作りいし網元佐平次蔵のみ残る

近詠十五首

盂蘭盆に必ず参る十三人の慰霊碑のこし村消えゆくか

幼日を姉と遊びし記憶なくわれは祖父（おじじ）の後ばかり追い

人住まぬ村を夜な夜な照らしいる灯台の灯の哀しからずや

遠からず消滅集落となるならん空家ばかりが増えてゆく村

ひと言随想

あるはずの故郷

先頃、消滅集落となった村に一日だけ嘗ての住民が集い、祭りを行ったというドキュメンタリー番組をテレビで見た。今後十年で消滅する集落が三千余。限界集落は六万余。特に北陸、四国地方に多いとのことだった。

私が生まれ育った奥能登の寒村も入っているのだろう。十八歳で家を離れてからは旅人として訪うだけであったが、故郷として厳然とあるはずの場所だっただけに、消滅という言葉は衝撃的である。

昭和十九年十二月十三日の機雷爆発（金属供出しようと動かした為）による住民十三人の死は、折に触れて聞かされていた。盂蘭盆には地区の西の端と東の端にある墓所と慰霊碑に参るのが慣わしだった。

灯台、霧笛、機雷、慰霊碑、分校、祖父、雪割草が、その夜の私の脳裏を巡ってなかなか寝付けなかった。